

木漏れ陽

10月

平成29年10月17日 第48号
発行佐賀市教育研究所
発行責任者 所長 中村祐二郎

研修の秋

～実感を伴ってわかった「安心感」と「冒険心」～



「〇〇の秋」。〇〇に、どんな言葉を思い浮かべられますか？「食欲の秋」「スポーツの秋」「読書の秋」「パルーンの秋」様々な〇〇が思い浮かぶことだと思います。学校では研究発表会や授業研究会等も多く行われ、先生方には「研修の秋」ともいえるのではないのでしょうか。

私がまだ教員生活7年目で、小学3年生を担当している時のことです。体育の「てつぼう運動」で研究授業をしました。クラスに器械運動、特に鉄棒を苦手としている子供が多くいましたので、好きになってほしいという願いがありました。学力の二極化といわれていますが、体育も「好き・嫌い」「できる・できない」が二極化している状況でした。ある子が、鉄棒で回るのを「こわい」と言います。「落ちたら痛い」「落ちたらどうしようと不安」「回る時にお腹に鉄棒が当たって痛い」などの理由です。子供の頃の私は、どちらかという、鉄棒が好きな子供でしたので、休み時間も鉄棒で足掛け回りなどをしてよく遊んでいました。ですので、その子の気持ちをわかったつもりになって「大丈夫、がんばって。」と気軽に声をかけていました。それでもなかなか体が動きません。そこで、体育倉庫の中にマットが置かれていたのを思い出し、鉄棒の下に置くと、恐る恐る動き出し、笑顔で取り組み出したことを今でも忘れません。運動の苦手な子供にとっては「安心感」が大事だということがよくわかりました。また、得意な子供は高い鉄棒に逆さにぶら下がり、「こうもりふり」に取り組みんでいます。そこからが、なかなか先に進みません。安全面に配慮しながらも、友達と関わりながらできる、「こうもりふりおり」につながる練習方法を紹介すると、「ちょっと怖いけどやってみよう」という挑戦につながり、意欲的に取り組みました。苦手な子供には「安心感」を、得意な子供には「冒険心」を。この授業を通して、私が実感を伴って分かったことです。

今から23年前、平成6年3月に佐賀市教育委員会が編集した小学校体育の「学習カード集」があります。小学校の体育部の委員になった先生方が集まって作られたそうです。一般化するために、全学校、全学年分印刷してファイリングされ、そのまま印刷してすぐに使えるようになっていました。数年前に、スキャンしてデータ化されています。教師向けの解説もあり、私も体育の指導書としてこの学習カードを参考に、実態に合わせて作りかえながら、フル活用させていただきました。資料の中には「『いつでも、どこでも、だれでも』体育の授業に取り組みやすくすると共に、児童の自主的な学習を支える資料として役立てたいと考えています。」と、この学習カードが作られた思いが書かれていました。体育学習の基本的な考え方は変わりません。今でも素晴らしい財産として残っています。

私が、体育の「楽しさ」や「めあて」について考えたのもこの頃です。「運動の楽しさやめあてにもレベルがある」ということを、身をもって感じました。そこをどのように見取っていくかを自分の課題として課して研修していたことを思い出します。実感を伴って理解したことは、何年たっても忘れません。

研究をしていると、どうしてもうまくいかないことが出てきます。授業がうまくいかなかったり、検証の仕方に悩んだり、原稿をわかりやすく書けなかったり・・・。「あの先生のような授業がしたい！」という憧れの先輩の授業を見るにつれ、自分の授業の後には落ち込んだものです。当時の校長先生が「研究をしている時は、長くて真っ暗なトンネルの中にいるようなもの。前が見えずに苦しくて悩むこともたくさんある。しかし、一途に取り組んでいると必ず一筋の光が見えてくる。」とおっしゃってくださいました。悩んでいた心に突き刺さり、涙が溢れてきたことを思い出します。研究も「安心感」と「冒険心」が必要だと実感した出来事です。

先生方にとって、充実した秋になりますように。



(学校教育課 指導主事 横地千恵子)

2年目研修企業・福祉施設等体験研修

従来初任者研修で行われていた企業・福祉施設等体験研修が、昨年度より初任者研修を終えた2年目の教員に対して実施されています。「社会人としての広い視野、豊かな教養、柔軟性に富む職務遂行能力など、教職員としての資質及び指導力の向上を図るとともに、学校と地域社会との連携を強めて、開かれた学校を推進するため」、原則として、夏季休業中に在勤地の市町内から選定・交渉して実施されました。2年目の先生方には、校内研修等の合間を縫っての体験研修、大変お疲れ様でした。

違った視点から学校を捉えたり、地域のよさを改めて感じたり、学校を離れての研修による収穫が、これからの実践に大いに生かされることと思います。

【研修先の概要】 幼稚園・保育園（7）公民館（3）高齢者福祉施設等（5）児童福祉施設（1）
県立博物館・美術館（2）店等のサービス業（15）佐賀城本丸歴史館（1）エコプラザ（1）
バルーンミュージアム（1）農業試験研究センター（1）佐賀青果市場（1）
佐賀総合運動場（1）佐賀県水泳場（1）佐賀空港ターミナルビル（1）
グランデはがくれ（1）佐賀少年鑑別所（1）

【研修の成果（所感等）より】

～少年が非行に走る前に学校や教師が果たすべき責任の重さを改めて感じた。～多くの職員が関わりながら、たくさんの書類を正確にかつ迅速に処理されていた。絶対にミスや遅れの許されない仕事は、多くの目で確認するという仕事の基本を再確認する機会となった。10代の少年を預かるという点で、学校と共通することもあり、学ぶことも多かった。職員の方から「日ごろからよく観察・記録し、少年の微妙な変化に気づきそれを職員全員で共有すること、そしてそれに対してどう動くのかを考え、先手を打つことを意識している」という話を聞き、学校でも大切にしたいことだと感じた。（昭栄中学校 小松直子教諭 研修場所：佐賀少年鑑別所）

児童・生徒の「自己有用感」を育む集団づくり



佐賀市教育研究所【児童生徒理解部】では昨年度までの研究を継承し、主題を「児童・生徒の自己有用感を育む集団づくり」として研究に取り組んでいます。自己有用感の獲得が自己肯定感の向上に結びつくと考え、小中学校の発達段階に応じた支援のあり方等について研究を深めています。今年度も、「学習集団づくり部」と「授業づくり部」に分かれて、それぞれ6名（小学校3名・中学校3名）の先生が、これまでの研究の成果や課題を踏まえ、顧問の先生の指導・助言のもと実践を重ねています。平成30年1月25日に開催予定の佐賀市教育研究発表会では、その成果や課題等について実践事例を紹介する予定です。

「自己有用感」とは「人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という自分と他者との関係を自他共に受け入れられることで生まれる自己に対する肯定的な評価」と捉えられ、自己有用感を育むことで、共感的（自分自身を認め、他者を尊重する）な自己肯定感が向上すると言われています。

日本の子供の自己肯定感は諸外国に比べ低いと言われています。平成29年度全国学力テストの結果では、文部科学省は「自分自身を認めている子供ほど平均正答率も高い傾向にある。」と分析していますが、実際、高校生を対象とした平成26年の国際調査では「私は人並みの能力がある」と回答した日本の高校生は55.7%、米国の高校生は88.5%でした。諸外国と比べ、学力がトップレベルであるにもかかわらず自己に対する肯定的な評価が低くなっています。教育現場においても、将来の日本を担う子供たちが、自分の価値を認識して、相手の価値を尊重するとともに他者と協働して、自分の可能性に積極的に挑戦し、充実した人生を歩むよう支援することが、今後ますます求められるでしょう。

一方、思春期といわれる小学校5年生から中学校2年生までは「自分が好きだ」とか「自分に満足している」という自己肯定感は下がり、後は横ばいし低迷するとの調査結果もあるそうですが、ここ10年は「自分にはよいところがあると思いますか」に肯定的な回答をする児童生徒が増えています。平成29年度は平成19年度に比べ、小学校で7.6%増の78.2%、中学校で10%増の70.7%です。還暦を過ぎても煩惱に振り回され解脱できない私の自己有用感是不安定であります。

（学校教育課 教育相談係 秀島 正文）